

仏教の女性性否定

源 淳 子

一 はじめに

一九六〇年代後半から、フェミニズムの理論は西洋文化思想史の男性中心的・女性抑圧の文化パラダイムの構造分析を徹底的に行ない、キリスト教の相対化の作業を遂行した。その結果、「フェミニスト神学」を生み出した。「フェミニスト神学」が創造された背景には、キリスト教がもっている父権的な性格が日常的営みの隅々に影響を及ぼしていたことを察知することができよう。その点では、日本の宗教・思想にはキリスト教のように明確な父権的一神教が存在しなかったこととも関連して、日本のフェミニズム理論の構築は、宗教・思想の分野で遅れをとっている。宗教・思想を含めた日本の文化パラダイムを相対化し、日本独自の文化パラダイムを解明することで、日本のフェミニズム理論の構築は可能だろうと考える。

日本の宗教・思想のもつ男性中心性・女性抑圧性は、神道

・儒教の中に指摘されている。そして、近年では仏教にもそのような指摘が見え始めた。「女人五障」などの差別性は何人も否定することはできない。しかし、現実には、その差別性は、仏教の「平等思想」の中で埋没させられている。そのような仏教の「平等思想」をフェミニズムの視点から解析すると、その思想には、差別性と平等性が二元論的に展開されてきたと指摘できるだろう。そして、それでは仏教の救済も徹底したものといえないだろう。

この小論文においては、仏教のもつ男性中心的・女性抑圧のパラダイムを女性性否定という点に絞って考察してみた。

二 性否定のもつ意味

仏教の基本的立場として、ブッダは出家を説いた。出家といいうまでもなく、家庭的世俗的な執着・束縛を離れて道を求める修行者である生き方を選ぶことである。出家以外の道

ではわざわざ多くて、仏道を修行するのに妨げとなるという意味が説かれる。出家には当然、性の否定が含まれている。人間がもっている煩悩を克服することで、仏という覚者に成ろうとするのであるから、ブッダは禁欲主義を課した。

出家は仏をめざす男女両性に課された。その点では、男性の中の男性性も女性の中の女性性も一切認められないのである。性否定は性差を無くし、両性が平等であることを意味する。仏道とは、男性性も女性性もなくし、真実に目覚めたものに成っていくことである。ブッダはその厳しさ・困難さを見抜き、「性の交わりを断つ」ことも強く説かねばならなかった。

しかし、男女の無性化は平等というわけにはいかなかった。ブッダの性否定には、「われは(昔きとりを開こうとした時に)、愛執と嫌悪と貪欲(といふ三人の魔女)を見ても、かれらと性の交わりを行いたいという欲望さえも起らなかつた。大小便に満ちたこの(女が)そもそも何ものなのだろう。わたしはそれに足で触れることさえも欲しない。」「美しいかたかれを誘惑させるな」などにみられるように、女性を修行の妨げとしてみていることは明らかである。つまり、女性を貶めることによって、禁欲主義が成立している。

男性の男性性否定による無性化は、女性性の否定をもつて

説かれたことになる。それは、性差否定の無性化、平等性が、男性優位に考えられたことであって、無性化による性の一元化は、実は、男性性を肯定しながら達成したということである。禁欲主義という性否定は、性差のない平等を表明するようであるが、そうではなくて、男性優位の性へのすりかえであつたのである。こうした男性優位の典型的な例は、初期の仏教教団の男性中心主義にもみられることは、改めて論じるまでもない。そのような男性中心主義は、現代の日本にまで及んでいるが、単に制度的な問題であると、切り捨てることはできないだろう。

教義の面で、男性中心性・女性抑圧性を明確に示したのが、「女人五障説」である。女性が仏に成れないとされたこの教えは、女性を一方的に否定した点で、女性を排除したことになる。

また、後に出てきた「変成男子説」も同様に、女性が女性そのものを否定して男性に変身しなければ成仏できないというものである。女性の成仏の可能性を提示したものであるが、男性の性への一元化を意味している点では、明らかに男性中心のであり、女性性が否定されて女性抑圧的である。しかも、この「変成男子」は、女性排除を決定づけると共に、女性に女性であることを厭わせた点で問題は大きい。それは、女性の不浄観、罪惡観へ連結していくものになるからで

ある。

「女人五障」「變成男子」については、別に詳細に論じる必要がある。

三 女人禁制

仏教の女性性否定が、日本で最も顯著に示されたものの一つを例に挙げて分析してみたい。出家思想を根本にもつ仏教は、日本仏教となっても、その性格を急変することはなかった。出家者はあくまでも妻帯しないことが原則であり、仏教は性否定のまま伝えられた。しかし、日本仏教は日本独自の歩み方を採っていく傾向も見せたのである。女性性を否定する方法も独自のものがある。その一つをあげるとするならば、奈良、平安仏教の諸山寺の女人禁制、女人結界である。

女人禁制が行われた理由は、次の時代に出た法然によって具体的に知ることができる。法然は「日本国にさしも貴き無止の靈地靈驗の砌には皆悉く嫌はれたり」として、比叡山、高野山、東大寺、崇福寺、金峰山、醍醐寺などを女人禁制の寺としてあげ、比叡山、高野山の理由を次のように明かしている。「五障の雲聳ゆることなく、一味の谷深くして、三従の水流ることなし」「三密の月輪普く照らすといへども、女人非器の闇をば照らさず。五瓶の智水等しく流るといへども、女身垢穢の質に灑がず。」

仏教の女性性否定（源）

これから考えられる女性排除の条件は次のようになる。まず、女性が「五障の身」であることがあげられる。これはインドの初期の仏教に出てきたもので、女性には五つの障りがあり、梵天王、帝釈天、魔王、転輪王、仏になれないというものである。法然は仏になれない女性を説明している。「仏に成ることは男子なほ難し、いかにいはんや女人をや。（中略）天上天下はなほ賤しき生死有漏の果報、無常生滅の拙き身にだにも成ぜず、いかにいはんや仏の位をや。申すに憚りあり、思へば恐れあり。（中略）女人の身は諸経論の中に嫌はれ、在々所々に擯出せられたり、三途・八難にあらずば、趣くべき方もなく、六趣・四生にあらずば、受くべき形もなし。しかれば則ち富楼那尊者の成仏の国には、『もろもろの女人あることなく、またもろもろの惡道なし』等と云へり。三惡道に等しくして、永く女人の跡を削る。天親菩薩の往生論の中には、『女人および根欠、二乗の種生ぜず』と云って、根欠敗種に同じくして、遠く往生の望みを絶つと云々。諸仏の淨土には思ひ寄るべからず。」これは法然以前の女性成仏の捉え方である。成仏は男性でも難しいのに、女性はいうまでもない、とまず女性の成仏は男性の外にあることを証す。それは、女性が諸経論に嫌われているからだとし、女性が生まれていくところは、仏国土でも淨土でもなく、迷いの世界しかないことをいう。女性は完全に救いの対象から

除外されていたものである。このことは、日本でもインドと同じく、女性が仏に成れないと考えられていたことを示している。

次に、女性は「三従の身」であるからという。女性は結婚前は父に、結婚後は夫に、夫の死後は息子に従うべきだといわれて、常に男性の支配下に隷属するものであるという考えである。女性が三従の身であると決められ、そのために女性は聖なる宗教領域から排除されたのである。男性に従属しなければならぬものは救いの対象外だったのである。

「三従の教え」はインドの『マヌ法典』に載っていて、当時の女性の生き方を呪縛したものであった。仏教独自のものではないが、インドの仏教にも採用され、経論に出てくる。日本では、「三従の教え」は儒教の教えであると捉えがちであるが、すでに平安期において、仏教の考え方に存在していたことがわかる。

さらに、女性は「非器」であるから、結界されているという。三密の月輪はすべてを照らすのに、女性だけが照らされない。女性は何の器ではないというのだろうか。これはやはり五障と関係があつて、成仏の器ではないということである。女性が成仏の道から排除されていることをいう。

そして、「女身垢穢」の理由は、女人禁制を成り立たせた。浄穢二元論で決定される女性の不浄視である。

以上、法然があげた女人禁制の理由を分析したのであるが、どの理由をとっても、女性を差別したものである。女人禁制は、性否定を実現化する場で、いろいろの理由をつけて女性排除を行ない、あたかも性否定が性差否定のようにみせかけたが、このような性の一元化がとりもなおさず男性の性への一元化のしかけであることは明確である。女性排除の理由はインド仏教からの流れを引いていることも一目瞭然である。法然は女人禁制を批判したけれども、法然も女性性の否定を克服したわけではない。

また、インドの仏教に、女性の不浄視が出てこないわけではない。「大小便に満ちたこの女」と表現された中には、女性の不浄視があつた。「設ひ我仏を得んに、十方無量不可思議の諸仏世界に、其れ女人有りて、我が名字を聞きて、歡喜信樂して、菩提心を発し、女身を厭ひ惡まん」^③「女身を厭患せん」などと、女性の身を厭う言葉が知られている。しかし、それらは日本にみられる不浄視と同じであるとは考えられない。

日本の場合に不浄観が強く出てくるのは、神道との関係が深いと考えられる。仏教伝来以前に存在した女性に関する不浄観は、月経、出産であつた。後の神社神道には、触穢と称して、穢れに接したら神社参拝や神事に関われない。また、当然穢れているもの自身も清浄になるまで神事に関われない

という「物忌令」が定められた。それ以外でも、懐妊、流産なども入っており、女性に対する穢れが目を引き。しかし、そのいずれにも穢れの期間が決められ、その期間を過ぎると神社参りも可能だった。

その点は仏教の女人禁制と異なる。仏教の場合は、女性そのものを穢れとして聖地から結界し、救いの対象から外したのである。神道の影響を受けたとはいえ、女性性を全面的に否定したのは仏教であつた。そして、女性も自身が女性であるという理由でわが身を厭い、わが身を罪なるものと自覚していった。平安文学、仏教説話などには、そうした数多くの女性のせつないまでの吐露が描きだされている。また、そうした不条理な生き方の中に、信仰と救いがあつたことを我々はどうのように考えたらいいのだろうか。

このように日本の性差別の特徴は、女性の「身」を垢穢であると貶めたところにある。それは、キリスト教の女性抑圧と決定的な違いをもたらし、男と女の関係にさまざまな形で影響し、所謂日本的な男と女の関係を形成していったと考えられる。

- 1 『スッタニ・パータ』八三五
- 2 同 九四三
- 3 同 七〇三
- 4 法然『無量寿経釈』『法然上人全集』七七
- 5 4に同じ

仏教の女性性否定（源）

新刊紹介

松田 和信 著

- 6 4に同じ
 - 7 4に同じ 七六〇七七
 - 8 『無量寿経』第三十五願
 - 9 『如来会』第三十五願
- △キーワード▽ フェミニズム、性差否定、性の一元化
(大谷女子大学非常勤講師)

『インド省図書館所蔵・

中央アジア出土大乘涅槃経梵文断簡集

——スタイン・ヘルンレ・コレクション——』

B五判・一二八頁

東洋文庫・昭和六十三年三月